

## 巻 頭 言

卒業式が終了して新学期が始まるまでの2週間あまりの期間は、年度内に行った講義や研究活動の内容を回顧し、4月から始まる新年度の準備などに当てることのできる、充電と移行の時間である。したがって、平常の時間の流れとは異なった属性を持つが、それにふさわしい重要な出来事があった。数年来、言語文化研究所も関わって、文学部と大学院言語文化研究科が連携して北京外国語大学日語系との間で行ってきた学術交流が一つの実を結び、正式に部局間協定として東アジア地域のグローバル人材育成に関する国際連携型の教育プログラムがスタートすることになったからである。これに至るまでには実に多くの準備が必要であったが、幸いにも双方の大学が互いの長所を認め合い、将来を展望し合った上で、ハイレベルの人材育成に共同で取り組むことになった。今後、どのように発展していくのか楽しみだ。昨今の状況を見れば明らかなように、グローバル化がすべて望ましい社会文化現象を出現させるのではなく、むしろ負の側面を多くもたらすことが予測されるが、しかし大きな流れとしては、そうした歴史の方向性を止めることは困難ではないかとも思う。

現実的な選択肢は、そうした状況のなかで生起する多文化間の摩擦や葛藤、日常世界における格差の拡大を是正するために、利害が異なる互いの立場を調停し調和的な秩序を生み出すために、何が必要なのか何ができるのかについて考えていくことである。東アジア地域に限定しても課題は山積している。大学教育の場でもそうした事態に対処していける高度の専門性を有する人材の育成が急務である。ささやかな取り組みだとはいえ、文学部と大学院言語文化研究科がそうした課題に取り組む姿勢を一つの形にしたことの意義は大きい。双方の部局の長が北京外国語大学の一室で関係書類に調印しあう様子をカメラに収める役目を果たしつつ、調印式に居合わせることができたのは望外の幸せだが、北京外国語大学で日本語を学ぶ大学院生に特別講義をする機会も与えられた。

何を取り上げようかと悩んだが、大学院の授業（比較文化特論）で取り上げた「山」をめぐる民間信仰についての授業内容を扱うことにした。「山」をめぐる信仰が近代国家の成立以後、どのような過程をへて国民文化として再編されていくのかを、富士山を事例に取り上げた。昨今の日中関係は「尖閣問題」に端的に示されるように、友好

ムード一色のものではない。そうした状況のなかで、日本の象徴とされる富士山を話題とすることにはどのような意味があるのか、文化的ナショナリズムを煽り立てるだけの自己陶酔的な行為なのかもしれないという思いもした。が、この際だから関東平野の一角で富士山を遠くに見て育ち、小学校で同名の歌を合唱した少年時代の「私」のなかにある、小さな〈富士山〉を考察してみたのである。

それにしても、中国の航空会社とのコードシェア便である飛行機の窓から見える、山頂に雪を抱いて威容を保つ富士山は、グローバル化した時代にあって、いったい「誰」のものなのだろうか。もちろん日本の国土の一部であることには間違いはないのだが、空中から眺め、一人一人の心に映じる〈富士山〉は、もはやそれを見ている者すべてのものなのかもしれない。情報やカネが瞬時に世界中を流れるグローバル化のなかで、ナショナルな利益の衝突は不可避となっているが、互いの誉れを認め合い、それに接する喜びを今後もシェアしていきたいものだ。富士山を媒介にして一人一人の「物語」がつながりあい、乗り合わせたフライトは二つの国を往来するのだから。そして、ふと思う。比較文化論という研究手法はコードシェア便のようなものかもしれない、と。

北京滞在の最終日に王府井大街の北京外文書店で入手した『日本文化史教程』（日本語版）が手元にある。中国人の研究者が書いたという点で、日本人と異なった論点が提示されているかもしれないと思い、購入した。日本文化が「融合文化」であると解説されている。また、古代中国において、日本という島国は「東夷」であり、中国の天下構造の一部とみなされていたとある。文化はいつの時代にあっても複数の要素の融合から成り立つ。特定の文化についてその内側と外側から融合性や混濁性を考察していくことは、グローバル化した時代における有意義な研究課題となっていくだろう。

最後に、本号に投稿していただいた方々に感謝申し上げたい。今後も着実な成果を積み重ねていくことで、文教大学の言語文化研究所としての存在意義を示していければと願っている。

平成25年3月26日

言語文化研究所  
所長 長谷川 清